

11 月 10 日

主教教会博士レオ

Leo Magnus (Papa Leo I)

(400~461.11.10)

～ペトロの後継者 Papa～

レオはトスカナ出身のローマ教皇（在位 440 年～461 年）で、グレゴリウス 1 世と共に大教皇と言われています。彼は大レオ(Leo Magnus) と呼ばれ、また使徒ペトロの後継者として教皇 (Papa) という称号も使われました。

彼は前任者の時代に、フランスで内戦を起こしていた二人の領主を和解させるなど政治面で活躍をします。また教理論争でも頭角を現し、教皇として選ばれます。

レオは、ローマの司教は他の教会に対して神の代理人としての首位権を持っていると主張し、ローマ司教こそ使徒の最高権威者であるペトロの使徒職を受け継ぐ者という見解を示しました。そして教皇としての地位を確立していきます。

また、マニ教などの異教や、ペラギウス主義、プリスキリアヌス派、エウテュケス主義といった異端の排斥に努めます。当時、キリストは神であり人ではない、逆に人であり神ではないといった異端がありました。そのような単性論と呼ばれる考え方に反対したレオは、カルケドン公会議において、積極的に働きかけたと言われています。



レオ 1 世と

アッティラの

会見

(ラファエロ画 1514 年)

レオはカルケドン公会議で、「キリストは真の神であり、真の人間である」と述べます。その朗読を聞いた司教たちは、「レオの口を借りて、ペトロが話した」と口々に言ったといひます。

彼が残した手紙には、単性論を批判したものやローマ司教の首位権を主張したものがあひ、173 もの書簡が残されています。また、教会の祝日の問題に触れた説教など 96 編をあつめた説教集も残されており、これは現在においても重要な価値を持つものとされています。

なお、ラファエロが書いた壁画にはアッティラという人物が出てきますが、彼はフン族の王であり、ローマを攻撃しようとしていました。その彼をレオは、十字架を持ち、祭服を着て、威厳をもって阻止したところが書かれています。

<特禱>

全能の神よ、あなたは主のしもべ、主教教会博士レオの教えによって公会を照らして下さいました。どうか天の恵みをもって公会をますます豊かにし、忠実な証びとを起して下さい。その生活と教えに倣ひ、わたしたちがすべての人に救ひの真理を宣べ伝えることができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン